



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	〈われわれ〉という過剰、その揺らぎとしてのエコノミー：国民国家成立期における境界の修辞学
Author(s)	浅野, 正道
Citation	国語国文研究, 131, 49-67
Issue Date	2007-03-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/93485
Type	journal article
File Information	kokugokokubunkenkyu_131-49-67.pdf



「われわれ」という過剰、その揺らぎとしてのエコノミー

—— 国民国家成立期における境界の修辞学 ——

浅 野 正 道

「われわれ」という一人称複数形、それは、そう名乗りながらそこを満たす個人とその名の下に語られる共同性とをあたかも無媒介であるかのように連結する。そして、誰ともつかぬ匿名性をゆるやかに形成しつつ、国民を代表し、表象することのできる場所をそのつど／再び開示する起点として機能してきた。さしあたり強調しておきたいのは、それが点であるということ、しかも、唯一の中心点であると同時に、必ずしも総和された全体に還元しつくすことのできない、分散したそれぞれの点でもありうるということである。

こうした一見すると矛盾した事態が可能になるのも、この人称がある種の過剰性、つまり誰もが個別に、そして具体的に担える一方で、誰もが決して十全には自分のものにすることができないという性質を備えているからだといえる。かくしてネイションは単なる幻想などではなく、この自分と密着した実質でありながらも、恣意的な個を超過した普遍性として語る主体に憑依することになるだろう。

その一方で、「われわれ」という呼称は、一人称である以上、自己のリミットの形象としての他者＝外部——をややもすると男性中心主義的に領土化され、「彼ら」と呼ばれているが——を必要とする。もともと、この自他の差異化は、「私」のような単数形の場合と全く同じやり方で遂行されるわけではない。そこにおいても、この一人称にして複数である呼称の過剰性が、また別の形で問題となるのであるが、しかし、あまりにも先走るのはこのあたりでやめにするでしょう。

さて、このような国民共同体における内と外との境界確定と運動した「われわれ」と「彼ら」との区分は、ともすれば、世界を単純に割り切ってしまうがゆえに悪質であるかのようにみなされてきた。たしかに、ある意味では、そのとおりであろうが、他方で警戒しなければならぬのは、分割という効果を産出する実践や言説の機構までもが単調に作動すると、すなわち、結果として実現されたものとその原因となるものが相似形をなすと何の根拠もないまま曖

味に確信してしまうことではないか。実際、これらの機構はその効果の見せかけの単純さとは裏腹な様態において機能しているかもしれないし、その戦略にしても機械的なものではなく、それなりに柔軟性を備えたものかもしれないのである。だが、従来の『国民国家論』はそうした可能性を十分に考慮してきたといえるだろうか。とりあえずは、国民国家成立期としばしば呼ばれている明治前半期における「われわれ」／「彼ら」の関係性について歴史的かつ理論的に考察したとされる論文、成田龍一「文明／野蛮／暗黒」を糸口に検証してみることにはしたい。

一

成田の前述の論考は、『貧天地饑寒窟探検記』（大我居士「桜田文吾」、日本新聞社、明治二六・六）や『最暗黒之東京』（乾坤一布衣「松原岩五郎」、民友社、明治二六・一一）などをとりあげつつ、一九世紀後半から二〇世紀初頭にかけての「貧民窟」に対する認識の変容を分析しようとするものである。

そこでは、まず、明治前期において「社会のすべての価値は、文明が野蛮かに二分され、野蛮は否定さるべき排除さるべき価値となつた」とする、ひろたまさきの「日本近代社会の差別構造」における二項対立図式に対して、「近代日本社会、あるいは近代社会は文明／野蛮の二分割で解明することができるであろうか」といった疑念が提示されている。成田によれば、「理性」「富有」「健康」を「価値」とする「文明」とは、それ自体としてではなく、「狂気」「貧困」

「病気」という対立する概念を「野蛮」として否定し、反転させることでたち現れてくるものだという。つまり、「文明」が先行して「野蛮」を排斥するのではなく、「文明／野蛮」の二項は同時に出現して「相互補完的に同一行為の表裏を構成する」というわけである。だとすれば、「文明／野蛮」は「内部／外部」を構成するのではなく、「ともに近代社会の内部に位置する」ものということになる。よって、真に外部を定立したのであれば、さらなる項目を導入しなければならぬが、その第三項こそが、「一組の価値／反価値の外部にあり、それらと切斷されている」もの、「文明と相補の関係をもち、文明とは異なつた秩序をもつ」ものと定義される「暗黒」なのである。

この三項図式は、なるほど単純なまでに明快なものといえるが、それが析出される具体的な手続きにおいてはその限りではない。とりわけ不可解なのは先に引いたような標語を掲げながらも、成田が実際には「暗黒」をもつばら「文明」を標準とした偏差として、そこから測定した「過剰」「逸脱」「欠落」としてしか記述していない点である。これでは「暗黒」が「文明」の価値と相補の関係を持たない外部にあるとは到底いえないし、ひいては「野蛮」のほかにあって第三項を設定しなければならない必然性自体も怪しくなってしまうのではないか。成田自身もその矛盾を認めてか、他方では「むしろ、暗黒も文明によって捕捉され記述されるのであり、暗黒とて文明の引力圏にはある」と述べてはいるが、残念ながらそれは自らの論理の致命的な破綻に気づきながらもなおそのことを糊塗しようとする、苦しい弁明以外の何ものでもない。

それにしても、ここで成田がいささか強引に定位しようとしている「外部」とは一体どのような性質のものなのであろうか。それは言表された内容において体系化され、分節化されている形態のことなのか、それとも、そのような言表や言表行為を外在的に構成していく流動的な力の領域のことなのか。成田は、どうやら本来分けねばならない二つの水準の内／外を不当にも混同しているようだ。仮にそれが後者の意味であるのなら、外部性の導入は、「文明」という二項対立的な体系の生成を再検証しようとする、成田の当初の企図にかなったものだといえよう。だが、すでに見たように成田のいう「暗黒」も、結局のところは「文明の引力圏内」に位置づけられた形態としての外部にすぎないものであった。いささか意地の悪い表現を用いれば、そこで展開されているのは「暗黒」という見せかけの絶対的外部を提示しながらも、それをいつの間にか体系内の差異の一項目に還元してしまうといった、ある種のすり替えの論法だということになる。そして、「野蠻」にせよ「暗黒」にせよ、いくらその数を増やしたところで「文明」という唯一の公理を中心とした平面上に配分されている限り、それらの項目は本質的に二元論的なものにならざるをえないだろう。そればかりではない。この有効性を欠いた瑣末な分類作業は、内容ばかりに人々の関心を集中させることで、結果として、真の「外」へと思考を差し向ける契機を封じるといった役割も果たすのではないか。形成する力の領域としての「外」に眼をつぶったとき、形成されたものの生成変化の瞬間は捨棄され、その不動の相しか見えなくなってしまうというのに、である。では、なぜ成田はこれほどまでに外部を希求するのか。成田によ

れば、『貧天地饑寒窟探検記』や『最暗黒之東京』においては「暗黒」として、「文明」と隔絶した、まさに「探検」すべき「別世界」として位置づけられていた「貧民窟」が、横山源之助の『日本之下層社会』（教文館、明治三二・四）などになると「われわれ」の内部における差異とみなされるようになるという。こうして日本国内から追放された「暗黒」は、新たに別の外部、すなわち「アジア、アフリカ、南アメリカのジャングル」あるいは「台湾や朝鮮」といった、人種主義や植民地主義に基づく「帝国の眼」の射程に据えられた地域と関係づけられるようになる。そして、このように「暗黒」を国外へ転移し、棄却することによって、「文明」を達成した国民国家としての「われわれ」『日本』という均質な共同性が「成立」する。それが成田の思い描く「物語」であり、そのためにこそ、「暗黒」という第三項の導入が要請されていたというわけである。

そこからうかがえるのは、のちに触れるように、外なる異質性に向かうには、まずは内なる同質性の実現が必要である——より一般化すれば、内なるものは外なるものに先行するということになるのだろう——とみなす、妙に律儀な遠近法的思考だといえる。さらに指摘しうるのは、その内における均質性は、歴史上のある時点において「成立」という形で完成していなければならないとする、ある種の思い込みだろう。このような単線的かつ予定調和的な成立前／成立後のモデルに従うと、国民国家について歴史的かつ理論的に考察する上で様々なリスクを背負い込むことになると思うが、なかでもまず問題にしたいのは、それによって国民Ⅱ国家を語る言説の機構における重層性が切り捨てられてしまうという弊害である。

この論文でとりあえず驚かされるのは、『貧天地饑寒窟探検記』や『最暗黒之東京』と横山源之助のテクストに関してことさらに断絶が強調されるばかりで、その連続性については一瞥も与えられていない点である。たとえば、成田は内地雑居にむけて「欧米人を『異人種』とみる視点」が生まれ、「貧民」を「われわれ」日本に編入させ、それと対抗しようとする『内地雑居後之日本』（労働新聞社、明治三二・五）における横山の認識が展開していったと断じているが、そこで従来の「貧民」に対する眼差しや言及の様態のすべてが清算されてしまったわけではなからう。なぜなら、成田もとりあげているように、その一方で横山は同書において「生活に欠陥を示す『貧民』を『社会の厄介者』『人間としては恥辱の極』と位置づけながら、『卿等の同類十分の六七迄が、貧民と生活を同ふすると聞けば諸君は如何に感ずるや』と『職工』たちに奮起を促しているからだ。しかし、成田は、現在の「職工」の不甲斐なさに苛立ちを「剥き出し」にしながら、一種の脅迫として彼らの外部に「貧民」という侮蔑的なカテゴリーを対置することで露骨に上下の価値を導入しているこの箇所を、「分類Ⅱ等価値の差異の併置という横山の『日本之下層社会』にみられた」観点をふみはずしてもいる」と認めつつも、結局は「内地雑居にむけての危機意識がそれほど強烈であつたためで、以後の著作では再び冷静さをとりもどしている」と平気でやり過ぎし、自己の図式の堅牢さを守ろうとするだろう。

だが、たしかに横山のテクストにおいて「貧民」をめぐる言説の秩序に生じた変容が観察できるのは事実だとしても、それを全き切断の結果として、成田の言葉を借りれば、それ以前とは「まったく

異なる認識」として語ることができない。どうやら成田は、「文明／野蛮／暗黒」といった静的な形態の水準における分類に腐心するあまり、可視的、あるいは、言及可能な対象として当の形態を産出する機構の力学を過度に単純化してしまっているようだ。彼に欠けているのは、こうした機構における歴史的裂け目が凝集した一つの力によってたらされるのではなく、それぞれが相対的に自立しながら交差する複数の言表の系列がその結合のあり方を変えることから生じるとみなす、より微視的な観点である。この一枚岩とはいえない変容を具体的に記述するためには、個々の系列における連続性にも繊細でなければならないだろう。

言説の機構における変化が系列的な出来事だということは、そこにおいて前と後をそれぞれに構成する共時的な秩序もまた単一のまとまりには収斂しえないということである。実際、それは、二項対立的に構造化された均質な体系とは似ても似つかない、およそ秩序という名にはふさわしからぬ錯綜とした様相を呈している。そのことを如実に示すのが、『貧天地饑寒窟探検記』における複数の視線の混在である。たとえば、桜田文吾は「貧民窟」の子どもと、裕福な「朱門金屋の家の稚子」^{ちひなご}とを比較して次のように述べている。

同じく是れも人類なり、一の罪なき嬰兒なり、先天に何の科^{とが}かある、是に對しなは如何なる人も一鞠の仁心を動かさ、らん
ここでは、「貧民」に対する「同情」（「仁心」）がいささか主情的に喚起されている。成田は認めたくないようだが、それは、横山に先立って「貧民」を「われわれ」（「人類」）の内部に位置づけることでなされているのだ。重要なのは、そうすると同時に、桜田が、へ彼

らゝの牛の「臟腑」などを食する習慣を「常人」とはかけ離れた「此社会」ならではの特異な表徴として語ることで、成田のいうところの「外部性の確認」も行っているということである。そして、この二つの、一見すると矛盾する眼差しの上に「貧民窟」の「真状」を調査によって「暴白」し、その鳥瞰図を作成しようとする、まだ充分に展開されてはいないものの、のちの横山にも通じる「客観性」を志向した第三の眼差しが重ね合わされることになる。同様のことは『最暗黒之東京』についてもいえる。松原は、その「純僕」さ、「血液の清潔」なる様子に共感しながらも、他方では、「怪人種」として「貧民」を表象する。そして、それらに加えて、彼もまた「貧民窟」という周縁の観察を通じて、東京という「茫然たる大動物」の様態を一望的に把握し、その「内部の生活的機能が時々刻々に働かしをなす有様」を「診察」しようとするだろう。

二

ところで、この互いに齟齬をきたしかねないまなざしの散乱を『日本之下層社会』の特徴とされる科学的に体系化された視点の歴史に位置づけ、両者の間に絶対的な切断を見出そうとする発想は、実はこの種のテキストを研究する際に根強く反復される一つの「定説」ともなっている。「底辺社会」記録文学研究の礎石を築いた立花雄一の著書では、すでに桜田や松原のテキストが、それなりに愛惜の念が込められながらも、「科学的記録性」に基づく最初の達成である『日本之下層社会』へ到着する過程で切捨てられた「道すがら」のもの

と位置づけられていた。⁵ 皮肉なことに、この構図は、『日本之下層社会』と比較され、過小評価されてきた『最暗黒之東京』の新たな意義を見出そうとした論者においてさえも強固に守られている。なぜなら、そこにおいても、それが「下層社会の生活を全社会構造のなかに組みこむ広い視野が欠けていたし、ヒューメインな心情の裏付けにも乏しいところがあった」ということ、また、「方法的に確立されたものではない。こんにちいわれるような科学的な客観性をもつものでもなかった」ということが、擁護とともに再確認されていたからである。横山のテキストにも見られるまなざしの重層性を隠蔽してきたものはこうした「定説」にほかならないが、一見すると新奇であり大胆に思われる成田の論考も、ある意味では、それを無批判に踏襲したものすぎなかったというわけだ。

それらに抗して、むしろ、ここで注目しなければならないのは、『日本之下層社会』が、『貧天地饑寒窟探検記』や『最暗黒之東京』とまなざしの系列のいくつかを共有しながら、にもかかわらず、その言説の配置が変容してしまっているという点だ。それは、言説の秩序を形成する系列相互の関係が組み替えられて、その「経済」配分が変化したということでもある。

たとえば、桜田や松原の記述において中心的な役割を果たしていた、調査者自身の身体の所在や主観を強調するルポルタージュ性は、『日本之下層社会』では後景に退き、単に副次的な情報を与える細部としてしか機能しなくなる。横山はかつて『毎日新聞』紙上に発表していた、桜田や松原と同様に自ら貧民に扮して取材した探訪記事のほとんどを、この「編纂の主眼を実証と科学と」に置いた本に収

録しなかったが、ごくわずかな例外に關しても、その「例言」に「或は本書体裁に不可なる者あらんか、唯だ懷旧の情捨つるに忍びざりしが故のみ」とあるように、あくまで消極的な位置づけにとどめているのである。

その代わりに中心化されるのは、自分の調査結果ばかりではなく、既存の統計資料をも網羅的に参照する、必ずしも一個人の直接的な経験性に限定されない匿名的な視座である。それがテキストの叙述を一次的な審級で梓づけ、著者が潜入した範囲に記述を限定していた『貧天地饑寒窟探検記』や『最暗黒之東京』とは異なつて、社会問題としての貧困の見取り図が全国規模で提示されるようになる。

力点はもはや調査の過程を上演することではなく、その成果としての知の集積を分類し、図表化すること、あるいは、そのように配分された知をいかに運用するのかにいうことに置かれるようになるのだ。こうして、叙述する者の真正性の源泉は、その場に自分がいた限りにおいて知りえたという特権性を示すことから、誰もが著者と同じように一人称で繰り返し問題を構成できるような台座を提供することへと移行していく。実は、これらのプロセスにおいて「客観性」と呼ばれるものが次第に強度を獲得していくわけだが、そのなかで「同情」はかつてのようにな露骨に主情的な表現をとるのではなく、社会全体の利害を「階級」という観点から構造的に把握しようとする「科学的」な態度のなかに組み込まれながら発せられることになるだろう。しかし、だからといって横山のテクストが、成田のいうように『「貧民」に限りない同情を示しつつ『冷静』な分析をおこない、同一の社会のなかの程度の差が下位の社会を形成し構成し

ているとする「認識において一元化されていたというわけではない。ここで、成田が一時的なものとして黙殺しようとした、『内地雑居後之日本』の「貧民」に対する蔑視に再び眼を向けてみよう。まず指摘しなければならないのは、成田が見逃しているごく単純な事実である。それは、この本と『日本之下層社会』とがともに「貧民」を扱いながらも決して同一とはいえない目的と戦略のもとに書かれ、また異なる読者層にあてられたものでもあったということだ。

『内地雑居後之日本』は、書中で「職工諸君」という二人称的な呼びかけが頻繁に繰り返されていることから分かるように、当時においては「貧民」との境界が必ずしも鮮明ではなかった「職工」を読者として想定し、彼らに内地雑居を機に招来する欧米との熾烈な産業上の「戦争」を勝ち抜く覚悟や、そうした「戦争」のためにも不可欠な、「資本家」と対抗して自らの高度な組織化を目指す「労働者」階級の代表としての自覚を促すことを意図した書物であった。そこでは『日本之下層社会』と同様に物価の変動、産業界の現状などに關する統計資料が提供されているが、それは「職工諸君」が「己れの生活状況」、さらには社会構造における自身の位置を「仔細」に知り、内側から問題化できるようにするためのものであった。そのような「職工」の主体化という目的において、彼らが一線を画すべき存在としての「貧民」を脅迫的に浮上させることは一定の戦略的機能を果たしていたといえる。

それに対して『日本之下層社会』は、「貧民窟」における「木賃宿」の描写の後で、「若し實際を暴露せば尚ほ甚だしきものあり、純潔なる我が読者に不快を与ふるを恐るゝのみ」という配慮が示されてい

たように、「下層」の実態を全く知らない外部の人々に向けられたものであった。そこで主として二人称的に呼びかけられていたのは、「偏頗なる社会」、「不公平なる社会」を大局的な問題として考察できる知識層（「世の特志者」）であり、そのような読者とともに横山は、「今日静かに日本の下層社会を研究し、斯の問題を提げて今日政治社会の腐敗を叫破し平民政治を開きて下層社会の幸福を謀らん」としたのであった。この場合、「職工」と「貧民」の微細な差異よりも、それらを「下層社会」の名のもとに一括し、社会的矛盾の範例として提示することが重視されているのである。そこからうかがえるのは横山が文脈に応じていささか場当たりに「貧民」との関係性を組替えているということだ。だが、そればかりではない。重要なのは一冊の書物のなかにおいてさえも「貧民」との関係性に揺れが見られるという点である。

たとえば、横山は、すでに見たように『内地雑居後之日本』で、「貧民」を引き合いに出して「職工」に檄を飛ばしていたが、その一方で、彼らが労働者一般の代表者となるためには、こうした「一般社会の例外に取扱はれ」るものたちを「我労働社会の一部分」とみなし、「気の毒を覚」える必要があるということも力説していた。また『日本之下層社会』でも、勤勉でありながらも社会的矛盾の犠牲となっている人々の集団として「下層社会」を規範化し、「今日政治社会の腐敗」を告発するというプログラムを内側から挫きかねないものたちに微細かつ冷徹な眼が注がれる瞬間がないわけではない。たとえば、そのような規範の「悪しき例外」である、「常備」や定住を厭う「日稼ぎ人足中最も劣等」な「立ん坊」について横山は、「乞

食と共に一種のイクチナシ」であり、「多くは放蕩の経歴を備へ、微毒に感染し居らざるは少な」く、やがては「公費によりて養育」される「社会の厄介者」に成り果ててしまふ存在だと辛辣にいい放っている。しかし、そのような蔑視もこの本の戦略と目的からすれば、あながち逸脱とすることのできない機能を果たしていたといえるだろう。

それらを通じて見えてくるのは、横山と「貧民」との関係が決して固定したものではないということ、さらに、くだんの「貧民」に対する蔑視が一時的な感情による逸脱などではなく、戦略的に操作される一定の機能として横山のテクストの構成要素をなしていたということである。そこに存するのは、単純に「蔑視」排除「外部性」とも「同情」包摂「内部性」とも割り切れない「貧民」との重層的な距離の取り方であるが、もちろん、そのような蔑視と同情の錯綜は一人の主体の認識上の矛盾だというわけではない。逆に、こういうべきであろう。これらのまなざしの揺らぎの結節点に、横山源之助として語る「私」が生成するのである。同様のことはまた「私」と連動して様々にその位相を変えていた二人称（受け手）や三人称（「貧民」という対象）、さらには、こうした人称と相關して「私」からシフトしていく「われわれ」という一人称複数形についてもいえるよう。そして、そのように揺らぎ、戯れる人称を変数として産出し、経済的に配分する言説の機構が、一定の歴史的状況において「科学的」といわれる横山のテクストの有効性を支えていたのである。

三

では、当初は「暗黒」として見出された「貧民窟」が「へわれわれ」の内なるものに転位していくにつれて、その代替物が国外に求められるようになったという、例の遠近法的な図式の妥当性についてはどうであろうか。はたして「文明の外部」はそのような律儀なまでに規則的な軌道を描いて国境を越えていったのだろうか。

こうした図式が自らの抽象性を露呈してしまうのは、おそらくはその収まりの悪さから成田が語ることを差し控えたのではないかと邪推されないわけでもない、大井憲太郎・樽井藤吉といった「厄介」な人々の名を想起するときである。たとえば、『時事要論』（板倉中、明治一九・一二）¹⁰において、「貧富ノ懸隔漸ク甚ダシク、貧民社会ノ状態ハ、実ニ富財偏集ノ弊ニ堪ヘザル者タリ、誠ニ浩歎ノ至ナリ、之ヲ実地ニ目撃スル所ノ志士仁人、奈何ゾ袖手傍觀シテ、其救治法ヲ慮ラザルヲ得ンヤ」と述べる大井に見られるように、彼らは横山源之助やその後の社会主義者たちに遥かに先駆けて「貧民」を社会の一部とみなし、救いの手を差し伸べようとしていたのであった。興味深いのは、そうする一方で大井や樽井が朝鮮の内政に介入するという、のちの帝国主義を微妙な形で準備する行為にも手を染めていたことである。

明治一八年五月、自由党急進派の指導者であった大井憲太郎と同志の小林樟雄・磯山清兵衛・荒井章吾らは、磯山をリーダーとする壮士二〇余名を朝鮮に派遣し、親清国派の事大党の大官を暗殺する

ことを企てる。彼らの狙いは、それによって金玉均らの独立党の政権を樹立させ、さらには朝鮮を清国から独立させるというものであった。しかし、渡韓寸前の磯山の愛心もあって計画は発覚し、翌年一月までに関係者一三九名は大阪・長崎などで全員逮捕されてしまう。いわゆる、大阪事件である。また、樽井藤吉も自由党グループとは一線を画する玄洋社と提携しながら、同じく金玉均支援を目論んでいたが、大井らが逮捕されるとそれに連座し、やはり試みは挫折することとなる。

明治二〇年に開廷された事件の公判で大井は朝鮮について、「風俗は野蕃極まる阿弗利加人の如く其刑は三族に及ぶが如き野蕃国」であると語っていた（七月二日）¹¹。この言葉は、一見すると自らを文明の側に位置づけ、その外部に「暗黒」を国境を越えた地点に設定しようとする発想の典型を示すもののようにも思われる。だとすれば、時代設定はいくぶん前倒しになるものの、やはり事態は成田の図式どおりに推移していったということになるのだろうか。

だが、事実はそれほど単純ではないようだ。むしろ、ここで生じているのは、内と外の境界が、一方で分割の欲望をかきたてながらも、他方ではその区分をひたすら曖昧にしたまま口にされつつづけるという、それとは全く裏腹な事態だといえる。

大井は自分たちの行為の侵略性を否定して、それがあくまでも隣国の「野蕃」な有様を「助くるの念」に起因するものであると主張していた。彼にとつては「朝鮮人も亦た父母兄弟」であり、「国を異にするが故に同情相憐み艱難相救ふの感念を起」こさない方がおかしいというのだ（同前）。啓蒙主義者の大井が「自由平等ノ仇敵」¹²と

して斥けた儒教に立脚し、日朝兩國の間に存する東方的な和親性(「発育和親」)による合邦を標榜していたとはいえ、樽井藤吉が説いていたのも基本的には同じ事柄であった。金玉均支援に奔走していた頃には一応の完成をみていた草稿を、朝鮮人にも理解できるようにとわざわざ漢文で書き直したという¹³『大東合邦論』(森本「樽井」藤吉、明治二六・八)には、次のようにある。

如朝鮮「其政治猶為君主專制」。而国力微弱。其国民感三痛苦¹。亦應²與³我同⁴。苟同⁵感也。則盍⁶同氣相求。同病相憐⁷也

つまり、朝鮮は今なお君主專制にして国力が微弱、その国民が痛苦を感じているのはわが国と同じであるが、いやしくも感を同じくするのならば、同気相求め、同病相憐まないわけにはいかないというのである。

このように見えてくると、彼らにとつて朝鮮とは単に外部であるばかりではなく、同時に、親しみをこめた内部でなければならなかったということが分かる。そして、この朝鮮人という「父母兄弟」に対する「同情」は、すでに触れたような、国内の「憐れむべき人」に向けられたそれとほぼ同じものであるといえよう。そこから、大井が「韓国の独立をたすけようとしたのは、人民を圧制から救いたいという彼の自由と人類愛からの要求以外の何ものでもなかった」¹⁴などというように「ヘヒューマニズム」の観点から彼を擁護しようとする論も一方では出てくることになる。しかし、問題は、分け隔てのない普遍性の発現ともいえる、この「自由と人類愛からの要求」が、半ば暴力的にあるはずの差異をないものにし、すべてを平準化

してしまおうとするところにあるのではないか。すなわち、国境の外においては民族的・文化的差異を、そして、内においては階級的差異を、である。

ここで、再び国内の「貧民」の語られ方に眼を向けてみよう。

大井は先に引用した『時事要論』で、貧富の格差をなくすための土地制度の改革、つまり寄生地主の禁止や土地の均等な配分(「土地平分法」)などの必要性を説いていた。その背後にあったのは、公判で口にされたような「今日の窮民は天賦より来るものにあらず多くは政治法律上の束縛干渉より来るもの」(七月二一日)であるとする見解であるが、それは「貧民」を生まれながらに能力の劣った存在として本質化し、いわゆる「規格外」の存在としてゲットー化しようとする当時の支配的な「貧民」観¹⁵からすれば、たしかに画期的なものであった。こうした認識において大井は、ある種の反政府的活動にほかならない、大阪事件をピークとする一連の民権運動を通じて「内治の改良」を試み続けたのであった。では、そもそも、なぜそのような「改良」がなされねばならなかったのであろうか。

それは「貧民」たちの蜂起という、国家にとつては「最悪」の事態を回避するためであった。しばしば大井はフランス派の政治家であり、大革命を礼賛していたかのように理解されているが、牧原憲夫によれば、彼は一貫して「仏国ノ悪習ヲシテ我國ニ伝染」させれば「国家人民害患此ヨリ大ナルハナシ」と考え、「水勢ヲ洩スコト幸ニ早クシテ、其激昂ヲ蒙ラズ」に済んだイギリスの「治水策」¹⁶に学ばねばならぬと主張していたという。そこに見られるのは、政府の現状を批判しながらも、その国家としての体裁は最大限に尊重しよ

うとする態度、そして、自由や平等の名の下に従属階級の人々を有めつつ、「国家人民」の一員としてコントロールしようとする態度であつたといえよう。それに対して、樽井藤吉の方はどうだったのだろうか。

樽井もまた自ら結成した東洋社会党の党則草案で、「自他平等を主義」とし「旧来の弊習を矯正し貧富の世襲を破壊」する旨を謳いあげていた¹⁷。そのような「矯正」が必要な理由は、結党直前の彼の発言からある程度は明らかにされう。つまり、それは、「国家ノ治安ヲ妨害」し、「暴逆無道ヲ逞」くする「虚無党」（＝ナロードニキ）の「我国」における「萌芽」を摘み取るためになされねばならないというのである（『東洋ノ虚無党』『錦江新誌』号外 明治一五・三・二¹⁸）。ところで、こう主張したのは、樽井が大井とは異なり、天皇中心の倫理体系を遵守する「尊王家」であつたことに起因する。その見地から彼は、「今日社会秩序ノ大権ヲ占有スル君主ヲ殲スヲ以テ第一ノ着手」となすような動向に対して危機感を募らせたのであつた。しかし、イデオロギー上の立場はどうあれ、「压制」を「敵」とし、「自由」を「味方」とする「精神」こそが「虚無党」を歓迎するのだという現状診断を下してその攻撃の矛先を政府へと移すとき、樽井の言説は大井のそれに限りなく接近しているといえよう。なぜなら、ここにおいても、いかにして革命を回避するかということが懸案事項となり、その文脈において国民の自由や平等をいまだに実現しようとはしない、換言するのならば、領土内のすべての人々を国民として主体に從属化させる努力を怠り、せっかくの国家装置をいまだ十全に作動させようとはしない現今の藩閥政府のあり方に非難が投

げかけられているからである。

大井は、「我貧民社会ノ不幸」とは、「彼ノ欧州ニ於ケル如ク、学者輩ガ社会ノ情態ヲ深ク察シテ、精密ナル注意ト懇切ナル保護トヲ以テ、社会ノ改良ニ従事セザル」ことにであると主張していた（『時事要論』）。さらに、この「不幸」は、必ずしも「貧民社会」に限定されたものではない。なぜなら、先に見たように、〈彼ら〉が自らの窮状を自覚し、それを生む社会構造に憎悪を抱いたとき、〈われわれ〉全体に破局的な事態がもたらされることになるからだ。階級を越えた同じ国民という共同性において「貧民」を内部化し、社会的コンフリクトにつながりかねない不均衡な格差を根本的に変更することなく——というのも、そこでは革命が回避されていたからであるが——単に見えないものにしようとする試みは、このような危機感と連動して出現したといつてよい。そして、〈危険〉な〈彼ら〉とは一定の距離を保持しながらも、「精密ナル注意ト懇切ナル保護」をもつてその振舞いを調査し、監視することが問題系として浮上するようになったのである。それはまた、大いなる同情と大いなる警戒とを同時に注ぐべき標的、すなわち内部化または外部化という二重の操作の対象としての「貧民」の発見でもあつた。

このように内でもあり外でもあるという揺らぎにおいて「貧民」を表象し、支配しようとする傾向は大井や樽井の時代にはまだ主流をなすものではなかったが、桜田文吾や松原岩五郎が出現した明治二〇年代においては、自由民権運動によつて過度に顕在化してしまつた国民間の分裂を止揚しようとする新たなナショナリズムの出現¹⁹とあいまって次第に強度を獲得していく。そして、それがやがて

三〇年代の横山源之助の一連の著作へとつながっていったというわけである。²⁰

『日本之下層社会』の「序」において島田三郎は、自由競争が「貧富懸隔」を生み、それがヨーロッパで「共產諸党」の「繁殖」を招いたように、やがて日本でも「平和攪擾」の原因となるのではないかという危惧を表明していた。ここで語られているのは、日清・日露の二つの戦争の狭間において産業革命が達成され、社会の資本主義化が急速に進行していくという、自由民権運動の時代からすれば想像だにできなかった局面である。見逃さないようにしたいのは、そのような局面においてさえなお、というよりむしろ、そのような局面であればこそ、容易には解消しがたい異質性や多様性を内側に抱えこんでしまっているゆえに引き起こされかねない事態に対する恐れが、いつそう高まっていたという事実である。こうした、そこからいつ分裂が生じるかもしれない断層によって社会が分断されているような状況が、成田龍一の主張する内部における均質性のへ成立と全く正反対のものであることはいまでもない。重要なのは、そのような状況をいち早く国民国家存続の危機として主題化していた大井や樽井が、同時に国境を越えてより広大な外部を志向する傾向の先駆にもなっていたという事実である。そして、それは、いまだ鎮圧しえない自らのなかの他者性に内側から脅かされる形でなされたのであった。

大井は大阪事件の法廷で今回の行動が、侵略を意図したものである、先年の甲申事件に際して生じた反日的行動（日本公使館の焼き打ちなど）に対する復讐を目論んだものでもないことを力説していた。

すでに見たように、それは純粹な「同情相憐み艱難相救ふの好意主義」という、国籍にとらわれない普遍的な心情に基づくものであったというのである（七月二日）。だが、そこに利己的な打算が全く含まれていなかったというわけではない。大井自身も認めているように、この事件は他者の救済ばかりではなく、拳兵を通じて朝鮮の保守派、そして、その背後に控える清国との間に摩擦を生み出すこととそれ自体を狙いとしたものでもあった。なぜかといえば、そのような「外患」を契機に、いまだ「私情」に支配され、「自愛心」しか持てない「野蛮の人民」の段階にとどまっている現今の日本人が、道理により「事の大小を比較」し、「社会の爲めに喜んで身を犠牲」とする「愛国心」をそなえた「開化の人民」へと脱皮することが、他方では期待されていたからである（七月二日第一回）。また、「養育和親」に基づく日朝合邦を説いていた樽井にしても、事件にわずかばかり先立つ明治一年から一四年に「征韓策の根拠地」を求めて挙行された無人島探検については、「予は平素より我国は先づ朝鮮を侵略するにあらざれば、発展の緒を開くこと能はずと思料するものなり」というように、²¹ 国境を越えることが、停滞した日本の現状を打開するための方便にはかならないとする見解を明確にうち出していた。明言はされていないが、のちの合邦の主張にもそのようなナショナリスティックな利害関心が、ある程度は含まれていたといえるだろう。

しかし、だからといって、くだんの普遍性の言説が、露骨な自国民中心主義を覆い隠すための単なるカモフラージュにすぎなかったというわけでもない。むしろ普遍性の言説はそれ自体のポジティブ

な機能を發揮していたといえる。その機能とは、超国家的な価値観によつてナショナルな行動に正当性が与えられるような、ある逆説的な枠組みの提示である。そうした枠組みにおいて、排他的であつたり利己的であつたりするナショナルリズムと普遍性の言説は、どちらが原因でどちらが結果だと一義的には確定できないような重層的な状態で絡みあい、互いに互いを支えあつていたのであつた。

たとえば、大井が自分たちのことを「国を取るものにあらずして彼れの国を強めてヤル者なり」と誇らしげに主張できたのは、一方では、〈野蠻〉な朝鮮に対して「之を捨て、其有様を傍觀するは我々自由平等の主義に於て黙するに忍びざる所」（七月二日）であるといつた使命感を抱いていたからにほかならない。そして、樽井においても、東洋社会党の主義である「身分平等、權利均一」などを「朝鮮支那」に「輸入」するという、一見すると内政干渉ともとられかねない行為は、「彼の奴隸人民の懶眠を攪破して以て大に東洋の衰運を挽回」するという道義と結びつけられていた（『朝野新聞』明治一五・七・五）。かたや啓蒙主義に基づく文明、かたや儒教に基づく東洋と、提示する大枠の性質が異なり、内容の面からすれば遠くかけ離れているようにも思える樽井と大井の言説ではあるが、大枠の普遍性の強度とともに日本の特殊な役割が確たるものとして肯定されるという機能の面から見れば、またしても両者はほぼ同じ構図に収まつてしまふのである。

では、なぜそのような肯定がなされねばならなかったのかというと、それは、ネイションの輪郭を縁取る内なる境界があまりにも不鮮明であり、脆弱だったからだということに尽きるであらう。いわ

ば、求心的なナショナルリズムの欠乏は、遠心的な普遍主義の過剰によつて補われていたというわけである。そして、この求心性と遠心性の結節点で〈彼ら〉は、本来〈われわれ〉と同じであるはずなのに、現状では遠く隔てられて自らの領土のなかでみじめに〈墮落〉してしまつてゐる存在として、国内の他者とは異なる回路を経ながらではあるが、やはり内または外の存在として曖昧に二重化されることになつたのだ。

こうして見てくると、ネイションの展開に関して内から外へという段階的な過程を設定することがいかに的外れであるかが分かる。そもそも〈われわれ〉として想像される範囲は地理的に定められた国境と必ずしも正確に一致するものではないし、越境を志向する傾向と内なる均質性を実現しようとする傾向にしても、そのように分割可能で、あるものから別のものへの移行という形で時間軸上に配列できるものではない。それどころか、両者のいくぶん緊張をはらんだ共存のあり方は、つねに／すでに〈われわれ〉なるものの組成を規定してきたとさえいえるのだ。

ここで、この越境を志向する傾向に対して帝国主義という名称を持ち出すことは、いささか粗雑さの謗りを免れない行為であるかもしれない。たしかに、樽井はともかくとして、大阪事件当時の大井は、しばしば指摘されているように、そう名乗らせるに足るあまりにも領土的な野心が希薄であつた。加えて、この名称自体が日本で一般的に用いられはじめるのが、明治三〇年代初頭くらいからだといふ歴史的な時期の問題もある。よつて、大井や樽井を帝国主義者とみなすことには多くの点で無理があるのだが、しかし、彼ら

の言葉において、おそらくそれなしでは帝国主義自体が作動しなかったのではないかと思われる、あるささやかながらも重要なレトリックの萌芽が認められることもまた事実なのだ。それは、いかにも無造作に相同性を設定しながら、重要な差異をこともなげに消去しようとする、類推のレトリックである。それは必ずしも征服に結びつくとは限らないとはいえ、その前提となりうる、異なる文化や民族に属する人々を本来の場所から引き離し、ひとしなみに「同じ存在」として扱うという操作を遂行するための最初の一步となるものでもあろう。大井や樽井に見られる、あらゆる意味で遠くかけ離れていたはずの朝鮮人たちを何の屈託もなく「父母兄弟」と呼ぶような普遍的な姿勢は、そのようにして構築されていたといつてよい。

この大雑把な類比によつて他者を同化しようとするレトリックは、のちに、内なる均質性を特権化するイデオロギーにほかならない家族国家観と奇妙な形で結びつく。そして、台湾領有、日韓併合、さらには大東亜共栄圏の建設へと、帝国主義が国家的事業として制度化され、システムとして本格的に展開していくなかで、そこにおいてもやはり特殊な権益の生産のために様々な形で必要とされる普遍性を備給する手段として、より大がかりに、組織的に活用されることになる。こうしてシステムの一角に生成した修辭学的な磁場において、昭和十七年に石炭統制会の坂田進は、朝鮮人に対する過酷な労務管理を「嚴父」「慈母」による「愛の鞭と涙の折檻」²³として語ることができたし、元大将松井石根も、日中戦争について「亜細亜の一家」の内に於ける兄弟喧嘩で、「恰も一家内の兄が忍びに忍び抜いても猶且つ乱暴を止めざる弟を打擲するに均しく其の之を惡む

が為にあらず可愛さ余つての反省を促す手段」²⁴であると主張することができたのであった。これらの例は、帝国主義というシステムが、遠隔の領土を支配するための高度に体系化された技術論のみによつて維持されていたわけではないということ、そこにおいて「最初の一步」が後々まで大きな役割を果たしていたということを証明してくれるものであろう。

四

さて、以上のように大井や樽井から帝国主義へとつながる系譜をとりあえず設定してみたのは、その黎明期から円熟期とでもいうべき時代に至るまで、国民国家なるもの、ひいてはそれを形成し、実践するナショナリズムが一貫して遠心的な傾向と求心的な傾向、あるいは、普遍性と特殊性という相対立する二項の不安定なバランスにおいて構造化され、また、そのような揺らぎを戦略として積極的利用してもきたということを改めて強調したかったからである。

このように、ある意味では矛盾に引き裂かれているともいえるナショナリズムの理論と実践のあり方を分析し、そこにおいて人種主義が果たす重要な役割を強調したのはエティエンヌ・バリバールであった。とりわけ彼の理論で画期的なのは、人種主義が擬似生物学的なもの（人体測定による犯罪者識別法や社会ダーウィニズムなど）に限定されず、普遍要因に準拠して人間なるものを解明しようとする、ヒューマニズムをも包含する幅広い概念としてとらえられている点である。かくして人種主義を反ヒューマニズムとして措定する

という誤謬を犯すことなく、『人間にたいする犯罪』が人間主義の名において、また、人間主義的言説によつて遂行される」事態についての踏みこんだ検証が可能になる。そこで、バリバールが重視するのは、人種主義における基本的な理論操作、「人間の内部で人類を構成する差異について考察することであり、人間が『人間』である基準を研究すること」、すなわち「分類」という操作である。この操作は、何によつて人間は人間になるのか、いかなる程度で人間になるのか、いかなる種類の人間になるのかなどと問ひかけながら、人間である／人間になることの基準を導入し、そこからの偏差を測定する。それによつて人間の序列化が必然的に促されることになるわけだが、その序列にはまた社会的、政治的などの様々な価値観が投影されてもいるのである。その意味で分類は、通常考えられているのとは逆に、現実の状況に対して中立的に行われるものではないのだ。²⁵ 思えば、横山源之助のテキストから「分類Ⅱ等価値の差異の併置」という図式を抽出しようとして空しく挫折していた成田龍一は、それらのことを逆説的に証明していたといえなくもない。

以上から引き出せるのは、〈同じ人間〉という尺度が、つねに内部性、同質性を実現するとは限らないという教訓である。それは同時に排除と選別、そして序列化のための普遍的な原理ともなりうるのだ。こうして、同じ尺度が国民共同体に一方で膨張をもたらし、他方では収縮をもたらすという二極性が形成される。そして、そのような曖昧な伸縮はまた共同体としての語りを遂行する「われわれ」の二重性、すなわち、重畳された「人間」としてのそれと国民としてのそれとの間で生じる揺らぎとしても表現されている。ただし、

ここで注意しておきたいのは、この「人間」としての「われわれ」が何も無制限の普遍性を導入するわけではないということだ。そのような事態は、内部における同質性が極限に至るまで徹底されるような事態と同様に周到に回避されている。というのも、そうしなければ、肝心の国民としての特殊性が雲散霧消してしまいかねないからである。したがって、ネーションなるものを明確に主張したいのならば、国境の内側と外側の双方においてそれぞれ差別的に境域を印づけている「彼ら」の異質性Ⅱ外部性を、ある程度は保存しておく必要がある。つまり、内においては階級的差異を、外においては民族的・文化的差異を、である。これらの差異は、時に応じて侮蔑、そして／あるいは同情の対象となり、特殊な「われわれ」の輪郭を際立たせていくが、皮肉なことに、この二重の対象化はあくまでも「人間」としての普遍的な原理によるものでなければならぬ。かくして内外の「彼ら」は「同じ人間」という尺度において、自在に引き寄せられたり遠ざけられたりするというわけである。この遠／近化のプロセスが地理的なものに単純に還元できないのは、もはやいうまでもないことであろう。

このように見てくると、当初導きの糸とした成田龍一の論考があらゆる点で不十分なものであることが理解できよう。つまるところ、その欠陥は、国境の強固さや内部の均質性についてのある究極の到達点、すなわち「成立」という終末Ⅱ目的を、とりあえず何らかの時期に設定せずにはおかぬ姿勢に起因しているといえる。そして、そのような姿勢は成田の論のみならず、いわゆる「国民国家論」に広汎に見受けられるものでもある。

「日本列島を中心とする一定の地域空間が『日本』として境界づけられ、表象されることは決してア・プリオリなものではないはずである」という問題意識のもとに、その「成立」時期の画定に躍起になる李孝徳もこうした動向の例外ではない。ちなみに李が「成立」の指標とするのは日清戦争であるが、それというのも、この出来事が外においては他国と周辺領土の帰属が争われ、内においては反乱の危機を抱えるなど、まだ明確な「国境」の存在しなかった日本に「自己」と対立しうるだけの「他者」を「発見」させ、そのことにより「くすぶり続けていた『内部』の境界」を「清算」させる契機になったものとみなされているからである。いわば、ここにおいても外なる異質性に備えて内なる異質性が姿を消していくような事態が夢想されているというわけだ。

さらに、こうした「成立」の物語は、それに見合つて安直な以後の物語へとしばしば接続されがちである。たとえば、自己の独自性を強調し、他の国民や民族との共通性よりは差異を強調する排他的な性格を内蔵しながら、国境を内側から作りだしあるいは支える強力な国家イデオロギーとして作用してきた「古典的静態的な文化モデル」を究極の到達点として指定する西川長夫は、「交流」「変容」「関係性」「多元主義」がキーワードになる新たな「動態的文化モデル」の到来の予言によつて、その失効をいささか楽観的に宣告している。静態から、それを単に反転させたにすぎない動態へ、そのような解放のプログラムはまた、題名さえ見ればおおよその内容が予測できてしまう小森陽一の『「ゆらぎ」の日本文学』（NHKブックス、一九九八）においても共有されている。これらに見られるのは、

境界について、固定した単一性と柔軟な複数性とを二項対立的にとらえ、前者が国民国家の強大さの指標であり、後者がその衰退の兆候であると、それこそア・プリオリに設定してしまうような硬化し、制度化された認識のあり方であるといつてよい。そこにおいて境界は、それが十全に機能している限り、異質性を排除しながら内を囲い込む不動の要塞めいたものとしてイメーজされている。しかしながら、すでに本論で見てきたのはそれとは全く逆の様態、すなわち国民国家の強力なエコノミーとしての境界の曖昧さや揺らぎが、それ自体戯れであるような諸人称のアレンジメントを通じて産出されてくる仕組みではなかっただろうか。

「われわれ」において語られるだけのもの、「われわれ」とともに語るように呼びかけられるもの、そして何よりも、その二つの中心で「われわれ」を代表して語るもの。これらの行為体によつて担われる人稱相互の力学は、当然のことながら「われわれ」という人稱が発せられる場において作動している。この人稱の過剰性に改めて焦点を合わせることで、本論の冒頭で予告した地点によりやく立ち返ることができる。

五

言語学者のエミール・バンヴェニストは、「私」が「私」という語を用いるのは誰かに話しかけるときだけであり、その誰かは「私」の話しかけのなかで「あなた」となるが、この対話の条件こそが人稱を構成するものであると指摘している。言葉が可能なのは、ただ

おのおの話し手が自らを主体として設定し、自分の言表のなかで「私」として自己を指し示すからこそである。そのように言表の内部にいる「私」は、外部にとどまっている「あなた」に対して超越的な地位にある。「あなた」は必然的に「私」によつて指示され、しかも「私」を起点として設定された状況のほかでは考えられない。とはいえ、「私」と「あなた」は互いに入れ替わることができる。「私」はつねに相手の話しかけのなかで「あなた」になることができるし、その逆もまた可能なのである。だから、ここでの「あなた」の外部性はあくまでも相対的なものだといえる。「私」が現働化し、「はいま／ここ」として指し示される対話の審級 (instances de discours) において、両者は相補的でありながら、内在／外在の対立に従い、かつ同時に互いに反転可能な位相にあるというわけだ。

こうした人称を形成する「私」「あなた」に、バンヴェニストは「彼」を対置する。それは「はいま／ここ」にいないものの、対話の審級の絶対的外部として定義された非人称だというのだ。また「彼」には、「私」や「あなた」を本来的に構成する「特殊な唯一性」が決定的に欠如しているとも述べている。「私」と「あなた」とが入れ替わりうるのは、発話する「私」とそれが話しかける「あなた」とがそのつど唯一のものだからである。しかし、このような関係は「彼」との間ではありえない。というのも、「彼」はそれ自体何ものをも特定のには指示せず、無数の主体でもありうるし、あるいは何の主体でもないこともあるからだ。だからこそ、アルチュール・ランボーの「われは他者なり」が、自我がその構成的同一性を喪失した「錯乱」を示す典型的な表現たりえているというわけである。

では、肝心の「われわれ」はどのように位置づけられているのか。まずバンヴェニストが注意を促すのはこの人称に内在する特異な複雑性である。そのことは、「私」の属性である唯一性と主体性とが複数化の可能性と明らかに矛盾するものだという事実に関わる。実際、「われわれ」とは話しているただ一人の「私」の倍数などではない。それは「私」と「非＝わたし」との接合なのである。そして、この接合は、その成分が互いに等価ではない、特異な型の新しい総体を形成する。「われわれ」においても優勢なのは、つねに「私」である。「われわれ」にしても、「私」を出発点とすることで始めて存在できるからだ。「私」は「はいま／ここ」の中心であるという超越性において、「非＝わたし」の要素——「あなたがた」ばかりではなく、その場には不在の「彼ら」も含めて——を従えているのである。

このようなバンヴェニストの議論からジャック・デリダが批判しつづけた「現前の形而上学」²⁹を看取するのはさほど難しいことではなからう。現前の形而上学は、存在者が存在するということは現前的に存在するということであり、真に存在するものとはいま、眼の前にありありと現れて、たしかにここにあるといえるものでなければならぬと規定する。そして、実現されるべき現前の十全性の程度に応じて存在するものの間に階層秩序を設定していく。問題とされるべきなのは、それが発話行為の現実的な諸条件を犠牲にしてまで、現前するものの同一性に対する信仰を墨守しようとする点である。たとえば、バンヴェニストはいささか理想的に、自己として透明に現前している「私」を中心に設定し、その「私」と「あなた」との相互主観的共現前を対話の本来あるべき姿として提示していた。そ

これにおいて隠蔽されているのは、語る自己（Ⅱ言表行為の主体）と語られる〈私〉（Ⅰ言表の主体）との間のずれや〈私〉と〈あなた〉との間に存する断絶である。そして、それらは現前を遅延させ、その同一性を引き裂く現実としての他者性だといえる。

だが、ここでバンヴェニストの図式における虚構性を告発したいわけではない。むしろ、この図式が〈いま／ここ〉にともにあるということ想像的に絶対化しようとする思考の、示唆に富む症例となつている点にこそ注目したいのだ。本論でとりあげてきたナショナリズムもこのような思考の一つのヴァリエーションであることはいうまでもなからう。そうとらえるならば、国民として語る〈われわれ〉について一体何が見えてくるのであろうか。

すでに確認したように、〈われわれ〉は、〈私〉が〈私〉であること、つまり、〈私〉が〈あなた〉との関係において〈私〉になつていくことではじめて可能になる。〈われわれ〉が特定のこの〈私〉において名乗られる行為は、たしかにそのつど一回性のものである。だが同時に、〈私〉とは〈あなた〉との応答関係において無限に反復可能なものでもある。たとえば、誰かが別の誰かに〈あなた〉と呼びかけることで〈私〉という主体となりながら〈あなた〉にも同様の主体化を促してゆき、それが幾度となく繰り返されるというように。この互いが特異かつ交換可能な〈私〉であるような人称のシステムは、そこで語られる〈われわれ〉にある両義性を付与することになる。それは唯一のこの〈私〉によって語られつつも、同時にあの人もなければこの人でもない無数の匿名的な〈私〉Ⅱ諸国民のめまいを起こすような連鎖でもありうるというものだ。こうして国民一般

という過剰が、きわめて具体的ではあるが、それを占有しつくすことなど到底できない個において語られることが可能になる。誤解しないようにしたいのは、均質性があるからこれらの発話行為がなされるのではなく、このような行為の方が逆に国民的均質性という幻想をつくりだしているということである。

こうした発話の審級は、二つの他者性を抑圧し、忘却することで成り立っている。先に見たとおり、一つは現前するものの同一性を内部において脅かすずれや断絶であり、もう一つは絶対的外部に置かれていたがゆえに排除されるにせよ包摂されるにせよ〈われわれ〉によって一方的に代表Ⅱ表象されるほかにない非人称の領域である。〈いま／ここ〉で〈私〉が語るといふ人称のシステムに基づいた国民国家（として）のナラティブに抵抗するためには、この不在としての〈彼ら〉に思考を差し向けなければならないだろう。

ミシェル・フーコーは〈私〉が語るといふ基盤に対して、非人称としての三人称が先行するということを主張した。まずもたらされるのは非人称の〈誰か〉（*on*）が語るといふことであり、「無名のざわめき」であつて、そこから可能な主体にとつての様々な配置が形成されてくるというのだ。³⁰ただし、この〈誰か〉が、相互の現前を前提とした人称の交換による匿名性とは似て非なるものであることは強調しておく必要がある。それはあくまで人称Ⅱ主体という形成の絶対的外部、すなわち〈外〉に存在するものなのである。

そのようなフーコーの思想における「分身」の主題について、ジル・ドゥルーズは次のように述べている。

（……）分身は決して内部の投影ではなく、逆に外の内部化であ

る。それは、へ一つを二分することではなく、〈他者〉を重複することなのだ。〈同一のもの〉を再生産することではなく、〈異なるもの〉の反復なのだ。それは〈私〉の流出ではなく、たえざる他者、あるいは〈非我〉を内在性にするものなのだ。重複において分身になるのは、決して他者ではない。私が、私を他者の分身として生きているのである。私は、外部で私と出会うのではなく、私のなかに他者を見出すのだ（……）³¹

ここには、国民なる概念に生成変化をもたらすために真になされねばならないことが暗示されている。二重に抑圧されていた他者性を〈私〉のなかに見出すこと、それは、あの「われは他者なり」を生倫理として実践することにほかならないであろう。

注

- 1 吉見俊哉編『21世紀の都市社会学 4 都市の空間 都市の身体』（勁草書房、一九九六）所収。以下、成田の引用はすべてこの論文から。
- 2 ひろたまさき『差別の視線 近代日本の意識構造』（吉川弘文館、一九九八）所収。
- 3 引用は岩波文庫版（一九四九）から。
- 4 引用は岩波文庫版（一九五四）から。
- 5 立花雄一『評伝 横山源之助——底辺社会・文学・労働運動』（創樹社、一九七九）九九頁。
- 6 前田愛『獄舎のユートピア』『著作集』第五卷（筑摩書房、一九

- 八九）所収。
- 7 中村良二「『もう一つの社会』の発見——松原岩五郎の都市調査——」川合隆男編『近代日本社会調査史（I）』（慶應通信、一九八九）所収。
- 8 拙稿「『貧民窟』、その解釈と鑑賞の手引き——明治二〇年代のラム・ルポルタージュを巡って——」『日本近代文学』（二〇〇三・一〇）を参照。
- 9 立花雄一『明治下層記録文学』（ちくま学芸文庫、二〇〇二）二〇八頁。
- 10 『明治文学全集12』（筑摩書房、一九七三）所収。
- 11 『大阪日報附録 国事犯事件公判傍聴筆記』『大阪事件関係史料集』上巻（日本経済評論社、一九八五）所収。以下、公判の発言の引用はすべてこの史料から。
- 12 大井憲太郎『自由略論』（中村芳松、明治三二・三三四）前掲『明治文学全集12』所収。
- 13 鈴木正『解説』田中惣五郎『叢書名著の復興11 東洋社会党考』（新泉社、一九七〇）所収。
- 14 本山幸彦『アジアと日本——アジア観の変遷を中心に——』『近代日本政治思想史I』（有斐閣、一九七二）所収。
- 15 拙稿「恥辱と〈浄化〉——明治初期における『貧民』追放の系譜——」『日本近代文学会北海道支部会報』（二〇〇四・五）を参照。
- 16 牧原憲夫「大井憲太郎の思想構造と大阪事件の論理」大阪事件研究会編『大阪事件の研究』（柏書房、一九八二）所収。
- 17 田中前掲書九三〜九八頁。

- 18 『明治文化全集』第二十一卷（日本評論社、一九二九）所収。
 19 拙稿「公共圏と〈国民〉の創生——明治二〇年代におけるプリント・ナショナルイズムの諸相——」『早稲田文学』（二〇〇三・九）を参照。
 20 のちに横山は、大井を頭領として労資協調路線を掲げて明治三四年に結成された大日本労働団体聯合本部に参加することになる（前掲『評伝 横山源之助』一八〇～一九二頁）。
 21 田中前掲書七四頁。
 22 井上清『日本帝國主義の形成』（岩波書店、一九六八）一八～一九頁。
 23 藤田省三『天皇制國家の支配原理』（未來社、一九六六）三五頁。
 24 石田雄『近代日本政治構造の研究』（未來社、一九五六）三八頁。
 25 エティエンヌ・バリパール『人種主義と国民主義』^{ナショナルイズム}同、イマニユエル・ウオーラーステイン『人種・国民・階級』（若森章孝他訳、大村書店、一九九七）所収。
 26 李孝徳『表象空間の近代』（新曜社、一九九六）一四頁、一九六～二二七頁。
 27 西川長夫『地球時代の民族Ⅱ文化理論 脱「国民文化」のために』（新曜社、一九九五）一一頁～一五八頁。
 28 エミール・パンヴェニスト『一般言語学の諸問題』（岸本通夫他訳、みすず書房、一九八三）二〇三～二六頁、二三四～二五二頁。
 29 たとえばジャック・デリダ『根源の彼方に グラマトロジーについて』上下（足立和浩訳、現代思潮社、一九七二）など。
 30 ジル・ドゥルーズ『フリーコー』（宇野邦一訳、河出書房新社、一

31 九八七）八八～八九頁。
 同上書一五三頁。

（あさの まさみち・北海道大学大学院博士課程修了）